



Title	ヒンディー語訳で読むチェータン・バガト : 小説『ハーフ・ガールフレンド』を通して
Author(s)	松木園, 久子
Citation	印度民俗研究. 2017, 16, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒンディー語訳で読むチャータン・バガト

—小説『ハーフ・ガールフレンド』を通して—

松木園 久子

はじめに

「インド史上最も売れる英語小説家」¹と称されるチェータン・バガト(Chetan Bhagat)の画期的な点は、英語作品の莫大な売り上げだけではなく、ヒンディー語やグジャラーティー語、テルグ語などインドの在地諸語に翻訳されていることでもあろう。彼の話題性や人気を考えれば、翻訳が出版されること自体は驚くに当たらない。しかし、実際に翻訳された作品をみると、単純に原作を別の言語に移しただけでない、複雑さに気づかされる。というのも、言語も文化的背景も全く異なる文学を翻訳するのとは異なり、英語とインド在地語の両方がすでに作品のなかに存在しているからだ。そもそも原作は英語で描かれているものの、作品の世界は英語だけで成立しているわけではなく、インド在地諸語は不可欠であり、バガトの場合、作品を重ねるごとに在地語の存在が大きくなっていくことも確認されている²。とりわけ小説『ハーフ・ガールフレンド』(*Half Girlfriend*, 2015)は、言語能力が主人公の人生を左右するほど、言語が大きなウェイトを占める作品だ。登場人物は英語を話すこともあれば、ヒンディー語を話すこともある。それをバガトが英語で描き、さらにヒンディー語などへ翻訳される。この過程で何が生じているのだろうか。何が加えられ、あるいは差し引かれ、どのような変化がもたらされているのだろうか。小稿ではこれらの点に着目し、『ハーフ・ガールフレンド』のヒンディー語版を考察したい。

今バガトに注目すべき理由をもうひとつあげたい。それは作品世界と読者が近いことである。主な登場人物は10代後半から20代の若い世代に属し、読者もまたこの年代に多いといわれている。厳密に言えば、登場人物はIITの学生など精鋭のエリートだが、彼らが日常的に大学のキャンパスやカフェで交わす会話は、現実の多くの若者が身近に感じる内容といえるだろう。若い世代を意識しているバガトだから、昨今の若者の言葉遣いを作品に反映さ

¹ “An Investment Banker Finds Fame Off the Books” *The New York Times* 26 March 2008.今も彼の代名詞のように用いられるフレーズである。

² 松木園久子「ヒンディー語である理由—チェータン・バガトの仕事から」

せることもあるだろうし、逆に登場人物の台詞を読者がまねることもあると考えられる。つまり、彼の作品を通して、現在または近い将来のインドの若者の姿を感じることができるのではないだろうか。

また、ここで翻訳を扱うことについても触れておきたい。翻訳作品には高い文学性を有するものもあり、原作とは別個の作品だとみなされることもある。たしかに訳者というフィルターを通過する限り、翻訳された作品には訳者の解釈や感性が色濃く残されるものだ。しかし、小稿では、『ハーフ・ガールフレンド』のヒンディー語版を、独立した一個の作品ではなく、あくまでヒンディー語で読むために編まれたものとしてとらえたい。つまり、ヒンディー語読者がバガトの作品に触れるときにみえてくる世界に焦点を合わせていく。

『ハーフ・ガールフレンド』ヒンディー語版における表現

まず最初に、英語とヒンディー語の果たす役割に注意しながら、小説の粗筋をたどってみよう。主人公マーダヴは、インドで「最も後進的で」「最も貧しい」とされるビハール州の没落した王族の末裔である。「第1幕デリー」は、彼が名門デリー大学セント・ステファン校にスポーツ推薦によって進学し、卒業するまでのデリー時代を描いている。小説冒頭の入学試験の面接に始まり、大学生活において英語は必須のものだった。学業のみならず、学生たちにとっては、流暢に、格好良く英語を話すことが人気の決め手となっていた。周囲の学生から発音を笑われ、田舎者とかかわれるマーダヴにとって英語は悩みの種で、ビハール州出身の教師や学友とヒンディー語で話す時間は心安らぐものだった。そんな彼が思いを寄せるリヤーは、デリーの都会で裕福な家庭に育ち、容姿端麗で英語も堪能な女子学生である。手の届かない存在だと思われた彼女だったが、意外にも親しみやすく、マーダヴの「半分ガールフレンド」の状態にまで達する。彼女に対しては、家族ぐるみでつきあいがあり、イギリスでホテル業を営むインド人青年が結婚を申し込み、一方マーダヴはキスを焦るあまりとんでもない暴言を吐くことになる。ここに、イギリス仕込みの英語を使いこなし、裕福で身のこなしもスマートなその青年と、下品なヒンディー語で女性を傷つけるマーダヴという構図が浮かびあがっ

てくる。いうなれば、使用する言語が男性としての格さえも象徴しているのである。その後リヤーは大学を中退し結婚のためにイギリスに渡り、彼女のいないデリーに魅力を感じなくなったマーダヴは大手銀行への就職をも辞退してしまう。

「第2幕ビハール」は、卒業後マーダヴが帰郷する場面から始まる。彼は母親が運営する学校に参画するが、設備も資金も乏しく、悪戦苦闘を続けるなか、思わぬ転機が訪れる。マイクロソフト社の創立者で慈善家のビル・ゲイツがビハール州を訪れる予定で、うまくアピールできれば莫大な援助を受けられるというのだ。ここで再び英語の壁が彼の前に立ちはだかる。英語のスピーチを習うために近隣の町の英語学校に通いはじめた彼は、リヤーと運命的な再会を果たす。彼女は離婚後実家を離れ、その町で単身働いていたのだ。二人の仲はどっちつかずの状態だったが、彼女の英語の手ほどきのおかげで、彼はスピーチをやり遂げ、見事ゲイツ財団から援助を受けることになる。地元の人々とともに歓喜にあふれるなか、突然リヤーは姿を消してしまう。後日発見された彼女の日記から、父親との確執やイギリスでの不幸な結婚生活、マーダヴの母に浴びせられた辛辣な言葉など、隠されてきた過去が明らかになる。

そして舞台は「第3幕ニューヨーク」へと移る。家族との関係を断ち切ったリヤーはかつて夢見ていたニューヨークのバーの歌手になっているにちがいないと信じ、マーダヴはゲイツ財団のインターンシップを得て、渡米する。彼の滞在を受け入れてくれたセント・ステファン校時代の友人は、いかにも金融エリートらしい生活を送っていた。マーダヴがニューヨークのバーを片っ端から訪ね歩き、帰国前日ついにリヤーをみつけるまでの間、当然ながら英語が使われている。とうとう結ばれた二人は、その後ビハール州に戻り、男児にも恵まれ、マーダヴの母と和やかに過ごすハッピーエンドの場面で小説は終わっている。

この作品がヒンディー語版ではどのように表現されているかを考察する前に、原作にはあってヒンディー語版では欠落している箇所があることを指摘しておきたい。1文だけ忘れられたように抜けていることもあるが、街や建物の描写が省かれていたり、また特定の登場人物に関する記述が複数の箇所にわたって削除され

た、意図的なものも見受けられる³。このような欠落は多数に及ぶため、詳しい検討は別の機会にゆずることにしたい。これらを除く大部分では、逐語訳とはいわないまでも基本的に原文に忠実な翻訳といえるだろう。ところが筆者の率直な第一印象は、「これがヒンディー語訳といえるのか」というものだった。それほど多くの英語がヒンディー語版には用いられているのだ。あたかも、日本語訳だと思って開いた本にカタカナで書かれた英語がびっしり並んでいるような違和感だった。しかし実際に日本語と比べればヒンディー語のなかに英単語が混ざっていることは珍しくはなく、若い世代の言語ではなおさらその傾向は強い。もはやヒンディー語のなかに英語表現が定着しているのかもしれない。あるいはこうした状況の反動で今後はヒンディー語の語彙を積極的に使用することになるのかもしれない。いずれにしても予測は困難であり、今筆者が感じている違和感も将来どのような意味を持つのかは不明である。そこで、ヒンディー語版が出版された2015年現在の状況を映す一資料として、小稿では考察を進めていきたい。

それでは原文と照らし合わせながら、具体的にヒンディー語版の表現を検討していこう。ただし、英語の原文に相当するヒンディー語が用いられ、翻訳として何ら不規則な点がみられない表現は以下の考察対象には含まないこととする。まずは、ヒンディー語に翻訳不可能と考えられる語彙をみてみよう。たとえば、飲食物や洋服および化粧にかかわる、「サンドイッチ」(सैंडविच; 原作では sandwich。以下同様)や「レモネード」(लेमनेड; lemonade)、「ビール」(बीयर; beer)そして「黒いタイトなジーンズ」(ब्लैक स्किन-टाइट जींस; black, skin-tight jeans)に「白と黒のストライプの T シャツ」(ब्लैक-ऐंड-व्हाइट स्ट्रिप्ड टी-शर्ट; black-and-white striped T-shirt)や「アイブロー」(आईब्रोज; eyebrows)などの語は、文字だけがデーヴァナーガリーに置き換えられている。その他ニューヨーク(न्यूयॉर्क; New York)などの地名やマイクロソフト(माइक्रोसॉफ्ट; Microsoft)といった

³ この作品に対して、マーダヴの設定と同名の、実在する一族が反発し、バガトにリコールするように訴訟を起こしている。ヒンディー語版で別の名前に変えられたり、一部の記述が削除されているのは、こうした事情をふまえてのことだと考えられる。

“Bihar royal slaps Rs 1cr defamation suit on Chetan Bhagat”
hindustantimes 23 April 2015.

商標名も原語のままである。またコンピュータや金融業に関する専門用語、歌詞も英語のままになっている。バガト自身の小説でも、インド料理やインド固有の衣服、親族名称、映画のタイトルや歌詞などが、インド在地語のままローマ字で表現されているが、同じことがヒンディー語版でも起きていることになる。

さらに注目したいのは、ヒンディー語に該当する語彙がありながら、英語のまま使われている例である。「英語」と「インド人・インドの」という語にはそれぞれヒンディー語の अंग्रेज़ी と भारतीय 存在するにもかかわらず、英語の English と Indian をデーヴァナーガリー文字で表記した इंग्लिश と इंदियन が圧倒的に多く用いられている。上記のヒンディー語の語彙も決して死語にはなっているわけではないが、英語を使った方が作品の世界観により合致するとみなされたのだろうか。

次に、ヒンディー語に訳される場合もあれば英語のまま使用される場合もある語彙をとりあげてみよう。「ボール」(ball)にはヒンディー語の गेंद と英語の बॉल がともに用いられ、「部屋」(room)に対しても同様にヒンディー語の कमरा と英語の रूम が両方みられる。これらの語は特に含意もない一般的な語で、使い分ける理由や効果は見当たらないため、恣意的に用いられたとのだろう。そのほか、副詞では「実際のところ」(actually)にもヒンディー語の दरअसल と英語の एक्चुअली が、動詞では「無視する」(ignore)にもヒンディー語の नजरअंदाज करना と英語の इग्नोर करना が両方とも用いられている。

以上の例とは対照的に、意図的にヒンディー語と英語に訳し分けていると考えられる場面がある。それはマーダヴたちの学校で催されたビル・ゲイツ一行の歓迎会である。集まった地元の人々の大半は英語が分からないが、マーダヴの英語のスピーチのなかに地名が聞き取れたり、彼の感極まった声色に反応して、盛り上がっていた。ビル・ゲイツが多額の援助を決めると、群衆はさらに喜びにあふれるという展開だ。ここで注目したいのは、感謝を表す言葉である。原作では、'Thank you.'または'Thanks.'とのみ表記される台詞が、ヒンディー語版では状況ごとに英語あるいはヒンディー語に訳し分けられている。たとえばマーダヴはビル・ゲイツと財団のアメリカ人スタッフに対しては英語の 'थैंक यू' と言い、一方そして歓迎会に協力してくれた地元の政治家にはヒンディー

語の‘शुक्रिया’と言っている。やはり目上の人物に対して感謝を述べるには、英語の‘थैंक यू’は軽すぎるのだろう。また原作で村人がマーダヴに対して言った‘Thank you.’も、同じく‘शुक्रिया’というヒンディー語に訳されている。この台詞には王族であるマーダヴへの敬意が込められている。原作では非常に多くの‘Thank you.’や‘Thanks.’が発せられており、ヒンディー語版でもほとんどの場合 थैंक यू、थैंक्स と英語のままになっている。しかし上述の場面では、ヒンディー語の‘शुक्रिया’がふさわしいという判断がなされたのだ。つまり、原作では‘Thank you.’か‘Thanks.’としか表記されていなくても、ヒンディー語版はそれが英語なのかヒンディー語なのかを明らかにせずには成り立たないのである。それゆえ、ヒンディー語でしか描けない場面が前景化したといえるだろう。

上の例では、話者の言語能力や人間関係から、使用されている言語を特定することができる。原作では、「〇〇語で言った」という記述がなされたり、登場人物について「〇〇語が話せる」などの言語能力に関する描写がある場合、あるいは「ビハール州の村人」などの設定によって、何語が使われているか推測が可能な場合もある。しかし、マーダヴやリヤー、ニューヨークで生活しているセント・ステファン校の卒業生といったバイリンガルの人々の台詞に関しては、原作を読む限り何語で話しているか必ずしも明確とはいえない。ヒンディー語に訳すにあたって、その判断は訳者の解釈に委ねられることになる。ここからは、ヒンディー語版において彼ら若いバイリンガルの人々の英語のまま残された台詞に注目してみよう。

彼らの台詞のなかでほぼ確実に英語のまま使われている言葉として、「プリーズ」(प्लीज; please)、「ソーリー」(सॉरी; sorry)、「サー」(सर; sir)などをあげることができる。さらには「本当に？」(रियाली?; Really?)、「OK だよ」(इट्स ओके; it's OK)、「もちろん」(ऑफ कोर्स; of course)といったフレーズも、ほとんどが英語のまま使われ、ヒンディー語に訳されることはごくまれである。もともとバガトの原作には短い台詞でテンポよく会話が展開されるという特徴があり、これらのフレーズもそれ自体でひとつの台詞になり、そのやりとりで会話が構成されることもある。そのため、ヒンディー語版をみても英語だけで会話が進行するパターンが少なくない。また、前後がヒンディー語で話される台詞のなかに英語が組み込まれる

こともある。実際にヒンディー語版でこれらの表現に出くわすと、デーヴァナーガリー文字では書かれているもののヒンディー語らしくない綴りになるため、戸惑うものだ。おそらく会話のなかで聞く以上に、視覚的に違和感が残るのだろう。このような英語の多用からは、少しでも英語を使いたい、格好をつけたいという若者の姿も連想される。

より長い台詞が英語のまま留められている例を次にみてみよう。たとえば、「とにかく私、もう行かなきゃ」(एनीवे, आई हैव टु गो; Anyway, I have to go,)、「君のステージ、すごくよかったよ」(यू वर रियाली ग्रेट ऑन स्टेज; You were really great on stage.)といった台詞がある。以下の例は、英語の台詞が会話のアクセントになっているといえるだろう。たとえばマーダヴが近づき過ぎたときリヤーは「お行儀よくしなさい」(बिहेव योरसेल्फा; Behave yourself.)と言ってたしなめたり、マーダヴの友人はからかい半分に「お前ら、最悪だな」(यू गाईज आर सिका; You guys are sick.)と発言しているものだ。

さらに集中的に英語が使用される場面がいくつかある。それらはいずれもビル・ゲイツの前で行うスピーチにまつわるものである。ある日マーダヴは授業中に突然、ゲイツ財団のスタッフ、サマンサからゲイツの訪問を知らせる電話を受ける。電話口から聞こえるサマンサの台詞が英語のまま記されている。「もしもし、マーダヴ・ジャーさんですか」(इज दिस माधव झा?; Is this Mr Madhav Jha?)。マーダヴの返事をはさんで、「ビル・ゲイツ財団のサマンサ・マイヤーズです。ニューデリーからかけています」(दिस इज सामंथा मेयर्स फ्रॉम बिल गेट्स फाउंडेशन, कॉलिंग फ्रॉम न्यू देल्ही!; This is Samantha Myers from the Bill Gates Foundation, calling from New Delhi.)と続く。この後も会話そのものは英語で続くが、ヒンディー語版において英語で表記されているのはここまでである。短い、ありきたりの台詞だが、予期しない相手から、聞き慣れないアクセントで早口で話され、マーダヴが慌てる描写へとつなげる役割を果たしている。この後にもマーダヴとサマンサによる会話の場面があるが、彼女の最初の台詞だけが英語で、やはり残りは英語交じりのヒンディー語で書かれている。これらの場面でもどこまで何語で表現するのか、という判断を訳者が下している。一読者としての意見を補うなら、もし会話の続きが全てデーヴァナーガリー文字の英語で書かれていたなら、非常に読みにくいものになっていたにち

がない。

マーダヴにとって英語でスピーチを行うプレッシャーは相当なものだったが、ヒンディー語版においては興味深い表現を提供している。マーダヴが母親の前で練習を行うとき、原稿を読み上げる箇所は英語、その前後のマーダヴと母親の会話はヒンディー語と使い分けられている。英語部分の力んだ、ぎこちなさとヒンディー語で話す、気負わない素の姿がコントラストをなしている。

スピーチのために通い始めた語学学校での練習風景でもまた、臨場感が増している。居丈高な教師とその指導に従うマーダヴのやりとりは滑稽だ。

「どうも。マーダヴ・ジャーです。私は英語で話すのが不安です」
(हाय, आई एम माधव झा एंड आई हैव अ फियर ऑफ स्पीकिंग इन इंग्लिश।; Hi, I am Madhav Jha, and I have a fear of speaking in English.)

「いいぞ。それから？」(गुड। और?; Good. And?)

「私は自分の学校がやっていけなくなり、閉鎖になるのが不安です」(आई हैव अ फियर दैत माय स्कूल विल नॉट मैनेज इटसेल्फ एंड क्लोज डाउन।; I have a fear that my school will not manage itself and close down.)

「その調子だ。他に不安は?」(गो ऑन। एक और डर के बारे में बताओ।; Go on. One more fear.)

「深く愛した人を忘れられないのでは、と不安です」(आई हैव अ फियर दैत आई विल नेवर बी एबल टु गेट ओवर समवन आई लव्ड डीपली।; I have a fear that I will never be able to get over someone I loved deeply.)

ヒンディー語版でヒンディー語として書かれた部分に下線を付したところ、教師が大して英語を話していないことが明白になる。これにより、教師の胡散くささが一層際立つことになるといえるだろう。

その後、リヤーによる厳しいスピーチの指導が待っていた。原作では、マーダヴが口ごもりながら話す様子が「…」などを用いて描かれ、直後にリヤーが訂正していることから、英語で話している台詞は見分けやすい。反対にヒンディー語で話されている箇所は原作では明示されていないため、訳者によって判断されたことになるが、たどたどしく話している部分と、自由に、自然に話している部分とで振り分けているようだ。そして肝心の、本番のスピーチ自体は全てヒンディー語で書かれていることも興味深い。マーダヴが流暢に話したことを示したのか、読者の読みやすさを

優先したのか、あるいは通常の翻訳のように単純に英語からヒンディー語へ訳したのか、いくつかの可能性があります、あるいは判断の根拠はひとつではないかもしれない。

以上、ヒンディー語版における表現をとりあげ、どのような効果をもたらすかを検討してきた。全体的にみると、ヒンディー語版とはいえ、原文をデーヴァナーガリー文字で音写した英語部分はかなり多い。しばしば、短く、印象的なフレーズがヒンディー語のなかに取り込まれることによって、読みにくさも生じる一方で、リズム感がもたらされているといえるだろう。反対に、英語で交わされていると推定される、たとえばマーダヴとサマンサとの会話をあえてヒンディー語で書くというヒンディー語版独自の訳出もみられた。

おわりに

小稿は、チェータン・バガトの作品のインド在地語版に対する漠然とした疑問から出発した。英語とヒンディー語の混在はどのように扱われているのだろうか。デリーの大学生の話し言葉やビハールの村人の発言、ニューヨークでの会話はどのようにヒンディー語版で表現されているのだろうか。実際に読んでみると、ヒンディー語版と銘打ちながら、あまりにも多くの英語が使われていたことは衝撃的だった。しかし、単に分量が多いだけではなく、何を英語のまま留め、何をヒンディー語に訳すのかという判断が、訳者によって戦略的に行われていたものと考えられる。その結果、原作にはないリズム感や英語部分とヒンディー語部分のコントラストを生み出したともいえるだろう。これまでもバガト作品のヒンディー語訳を手掛けてきた訳者スショービット・サクターワト(सुशोभित सक्तावत; Sushobhit Saktawat)に対して、バガト自身は「まさに自分が必要とするスタイルを持っている」と信頼を寄せている⁴。果たして、ヒンディー語の読者はどのような感想を持つのだろうか。今後の課題として、引き続き考察していきたい。

⁴ "हिंदी पर बोले चेतन भगत, भाषा की शुद्धता पर जोर हमें प्रवाह से काट देगा" (チェータン・バガト、ヒンディー語を語る：言語の純粹さへのこだわりは孤立への道) *दैनिक भास्कर* 14 September 2015.

使用テキスト

日本語

松木園久子 2016. 「ヒンディー語である理由—チャータン・バガトの仕事から」 『印度民俗研究』 第 15 号, pp. 127-150.

英語

Bhagat, Chetan. 2014. *Half Girlfriend*. New Delhi: Rupa.

hindustantimes 23 April 2015 (<http://www.hindustantimes.com/books/bihar-royal-slaps-rs-1cr-defamation-suit-on-chetan-bhagat/story-wH16UnlnPpEebt4Iyief6L.html> 2017 年 2 月閲覧)

The New York Times (<https://mobile.nytimes.com/2008/03/26/books/26bhagat.html> 2017 年 2 月閲覧)

ヒンディー語

दैनिक भास्कर (<http://www.bhaskar.com/news/MP-BPL-HMU-chetan-bhagat-statement-on-hindi-5112708-NOR.html> 2017 年 2 月閲覧)

भगत, चेतन. (अनुवादक: सक्तावत, सुशोभित) 2015. *हाफ गर्लफ्रेंड*. नई दिल्ली: रूपा.